

序論)

私達は今、非常に多くの情報にふれることができる時代にいます。一度、パソコンやスマホでインターネットの情報に目を向けると、一つの事柄に対して肯定する意見もあれば、否定する意見もあります。また、何かのやり方、例えば DIY で壁を補修するやり方とか、そういったことを調べてみても、色々なやり方が紹介されています。その結果、どうすることが一番なのかがわからない状態になって迷ってしまう人も多くいます。

それは結婚という問題にしても同じなのではないでしょうか。最近では結婚自体の価値や意味が薄れており、わざわざ結婚しなくても同棲していればそれで良いと考える人もでてきて、結婚することが本当によいことなのかどうかもわからない時代になっています。

コリントの教会の人たちも、自分たちは結婚をした方がいいのか。独身でいた方がよいのか。迷っていたのです。今日の箇所は、そんな結婚に対して迷いの中にいる人たちに対するパウロからのアドバイスが書かれている箇所となっています。

文脈)

まずは簡単に文脈を振り返ってみましょう。

パウロはこの手紙を書く前にコリント教会の人たちから、結婚や離婚、そして男女の交わりについての質問が書かれた手紙を受け取っていました。特にコリント教会の中には「男が女に触れないのは良いことだ」(1 節)と主張していた人たちがいたようで、パウロはその意見に対する回答として、結婚中の男女の営みや別居の問題、そして、離婚の問題を 7 章の前半で述べていました。

パウロは決して結婚を否定していませんでした。むしろ、性的誘惑に負けるようなら早めに結婚した方が良いと勧めていましたし、既に結婚しているのならば、信仰を理由にして離婚してはいけないと教えていました。パウロにとって大切なのは、結婚しているかどうかではなく、主によって召され救われているということでした。

ですから、神様に救われた時のままの状態ですべて生きていくことを教えるために、割礼や奴隷問題を取り上げて、大切なのは見た目や社会的立場ではなく、主に召された者として、そのままの状態ですべて生きていくことであると前回の箇所で教えたのです。

そして、今日の箇所でパウロは話を結婚に関することに戻し、未婚、婚約、再婚

の問題を取り扱っています。

大前提)

今日の箇所を理解する上で大切なのは、パウロがこの箇所で勧めていることは、パウロからのアドバイスであって、【主】からの律法や命令ではない。ということです。(25 節表示)

パウロは今日の箇所で、結婚をせずに未婚のままでいること、婚約中のままでいること、そして、再婚しない状態であることを勧めていますが、それはパウロからの参考意見であって、絶対、その通りにしなければいけないという事ではありませんでした。

1) 状況に応じて最善を選ぶ

では、なぜパウロは未婚や独身であることを勧めているのでしょうか。

26 節を読みましょう。

7:26 差し迫っている危機のゆえに、男はそのままの状態にとどまるのがよい、と私は思います。

「差し迫っている危機のゆえ」これが、パウロが独身を勧める第一の理由です。コリントの教会が置かれている状況というのは決してよいものではありませんでした。コリントの町には性的誘惑が蔓延し、不品行の波が教会の中にも入り込んでいる状況でした。その上、ユダヤ人や異邦人からの攻撃に教会がさらされており、とても家庭の平安や子どもの成長のために心を割きながら、キリスト者として【主】に仕えることに専念できる状況ではなかったのです。

コリント教会には悩みの種があまりにも多ありました。だからこそ、パウロはコリント教会の人たちが多くの悩みを抱えることによって必要以上の苦難を経験することがないようにするために、未婚や独身、もしくは婚約中であつたとしても結婚しないという選択を示したのです。28 節に書いてある通りです。

7:28 しかし、たとえあなたが結婚しても、罪を犯すわけではありません。たとえ未婚の女が結婚しても、罪を犯すわけではありません。ただ、結婚する人たちは、身に苦難を招くでしょう。私はあなたがたを、そのような目にあわせたくないのです。

大切なのは状況に応じて最善を選ぶということです。

パウロは「男はそのままの状態にとどまるのがよい」といいながらも、**27 節**で「妻と結ばれているなら、解こうとしてはいけません」といい、**36 節**で「結婚すべきだと思うなら、望んでいるとおりにしなさい。」といっています。

パウロにとって、結婚するか、しないかは、どちらを選んでも罪にならない問題であり、乱暴な言い方をすると、「どっちでもいい」問題なのです。

大切なのは信仰的な理由をもって、しっかり状況を判断し、決心をする。ということです。改めて 36 節を読んでいきましょう。

7:36 ある人が、自分の婚約者に対して品位を欠いたふるまいをしていると思ったら、また、その婚約者が婚期を過ぎようとしているなら、結婚すべきだと思うなら、望んでいるとおりにしなさい。罪を犯すわけではありません。二人は結婚しなさい。

当時、ローマ・ギリシャ社会では結婚の適齢期が決まっており、特に女性は 15 歳ごろから 20 代前半に結婚するのが一般的でした。また、婚約は結婚とほぼ同じ重さがあり、婚約しているにも関わらず結婚をせず、婚約状態を長期間維持するということは、女性にとって不名誉なことでした。だからこそ、婚約しているにも関わらず結婚しない状態にいるのが、婚約者に対して不適切だと判断するのならば、結婚しなさい。と勧めています。でも、パウロはさらに 37 節のようにも言っています。

7:37 しかし、心のうちに固く決意し、強いられてではなく、自分の思いを制して、婚約者をそのままにしておこうと自分の心で決意するなら、それは立派なふるまいです。

つまり、誰かに強いられてではなく、自分たちの判断として結婚をせずに婚約状態のままでいることがふさわしいと判断して、そのことを決意するのなら、それも立派な振る舞いだということです。

大切なのは、一クリスチャンとして、責任をもって信仰的判断をしているかどうかということなのです。

皆さんは命令されることが好きでしょうか？ 好きじゃないと思います。でも、自分で判断して、自分で決心して、自分で自分の責任を担って行動することを避け

る人もいます。なぜならば、その方が楽だからです。自分で考えずに誰かに言われたからという理由で、行動した方が負担は減ります。だから、世の中にはすべてのことを良いか悪いか、善か悪かだけで判断しようとする人がいます。そして、そういう人に限って、聖書を律法的に読みます。

でも、そうではないのです。聖書には確かに私達が従うべき命令が書かれていますが、聖書に書かれていることはそれだけではなく、時には私達自身が信仰によって状況判断し、人に強いられてではなく、信仰によって自分でしっかり決心することを求める時もあるのです。

私達の人生も、時や状況に応じて色々な決心をしていかなければいけません。例えばどの学校に行くのか、どこに就職をするのか、誰と結婚するのか、どこに住むのか。今週一週間どのように歩むのか、聖書はそれらの問題について具体的な指示はしていません。その場合、私達がすべきなのは、聖書が教える価値観や基準に従って、自分で信仰的に決心をしていくことなのです。

2) 基準は何か？ - ①この世は一時的なものであるとう価値観

問題は、聖書が教える価値観、基準とは何か？ ということです。

今日の箇所は二つの基準を私達に教えてくださっています。

一つ目の基準は、「永遠の視点」「終末を見据えた視点」で物事を判断するべきということです。29 節から 31 節を読んでみましょう。

7:29 兄弟たち、私は次のことを言いたいのです。時は短くなっています。今からは、妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。

7:30 泣いている人は泣いていないかのように、喜んでいる人は喜んでいないかのように、買う人は所有していないかのようにしていなさい。

7:31 世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。

(29 節表示) パウロはここで「時は短くなっている」と語っています。これは簡単に言えば、時間が短縮しているということです。何の時間が短縮しているかというと、この世の価値観、この世の人たちが支配する時間が短くなっているということです。

みなさん、今私達が触れているこの世の価値観や物質は永遠ではありません。必

ず、この世の価値観は変わってしまいますし、物質も朽ちていきます。

(31 節表示) 聖書は今私達が生きている世界は、過ぎ去っていくものであり、一時的なものだと教えています。だからこそ、私達は永遠に続くことのないこの世の物事にあまり深く執着するべきではないのです。

みなさん、イエス様が、サドカイ人たちに復活についての質問をされた時、何と応えられたか覚えていますか？ イエス様はこのように言われました。マルコ 12:25

マルコ 12:25

死人の中からよみがえるときには、人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。

みなさん、私達が復活したら娶ることも、嫁ぐこともない、つまり、人と人が結婚することもないのです。だから、私達が結婚したとしても、結婚しなかったとしてもそれは罪にはなりません。

だから、みなさんがどこに住み、どんな仕事をしたとしても罪になることはありません。もちろん、聖書が明確に禁止しているようなことはだめですけど。

だから、私達はこの世の出来事を自分の人生のすべてかのように固執するべきではないのです。

だから、**(29 節表示)**「妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。」というのは結婚に拘りすぎないようにしなさいということですし、**(30 節表示)**「泣いている人は泣いていないかのように、喜んでいる人は喜んでいないかのように」というのは自分の一時的な感情に支配されないようにということです。そして、「買う人は所有していないかのようにしていなさい」というのはこの世の財産や富にとらわれないようにしなさいということです。

大切なのは、この世のものは一時的なものであり、やがて与えられる永遠の世界に比べれば取るに足らないものであるという価値観なのです。

みなさんは、この世の物事、結婚や仕事や財産や立場などを、自分の人生のすべてのように考えていないでしょうか。大切なのはそこではないのです。

大切なのは【主】が与えてくださる永遠のいのちであり、永遠に変わることはない【主】御自身なのです。

3) 基準は何か？ - ②【主】に集中できているか

大切なのは、その永遠に変わらない【主】に集中できているかです。だから、パウロは独身であることを、より良いものとして勧めています。32節を読みましょう。

7:32 あなたがたが思い煩わないように、と私は願います。独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。

この「思い煩わない」は「心配しない」とも訳せますが、原語的には、心を二つに分けない、分散させない。というニュアンスがあります。

パウロは、心をあっちこちに分散させるのではなくって、一つに集中することがキリスト者には必要なんだと判断していました。

では、何に集中するかというと、「どうすれば主に喜ばれるか」ということであり、「どのように【主】に仕えるか」ということです。35節を読みましょう。

7:35 私がこう言うのは、あなたがた自身の益のためです。あなたがたを束縛しようとしているではありません。むしろ、あなたがたが品位ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるようになるためです。

みなさん、パウロは教会の人たちを支配するため、束縛するために独身を勧めたわけではありません。むしろ、教会の人たちが祝福されて益を得るために勧めているのです。そして、その教会の人の益になることこそが、「ひたすら主に奉仕できるようになる」ということなのです。

みなさん、この手紙は牧師や宣教師といった教職者に向けて書いた手紙でしょうか？ もしそうであるのならば、カトリックの人たちみたいに教職者たちが独身でいることは相応しいといえるかもしれません。でも、この手紙は教職者宛ではなくって、コリント教会にいる信徒一人ひとりを対象にしているのです。

だから、「ひたすら主に奉仕する」というのは教職者だけでなく、キリスト者全員がすべきことであり、それは教会員一人ひとりの益になることなのです。

みなさん、【主】に奉仕できるということは恵みです。だから、私達は色々なことを心配して、心を割くのではなく、【主】に集中して、【主】に仕えるためにはど

うしたらいいか。それを基準にして物事を判断していくのです。

みなさんは、自分の人生において、「いかに【主】に喜んでいただくか」「どのようにして【主】に仕えるのか」を基準に据えて物事を判断しておられるでしょうか。結婚するにしても、しないにしても、再婚するにしても、しないにしても、みなさんが、どの学校にいき、どんな仕事をし、何をするかにおいても、大切なのはこの世のものごとではなくって、【主】に喜ばれるかどうか、【主】に仕えることができるかどうかなのです。

みなさん、改めて自分の人生の選択が、【主】を基準にしているものかどうかを吟味してみましょう。特に忙しかったり、苦しかったり、大変な状況ならば、なおさら、【主】のみに集中できるように自分の生き方を決めていくことが大切です。

それこそが、パウロが独身をよりよいものとして勧めている理由なのです。

結論)

コリント教会の人たちが結婚について迷っていたように、現代の私たちもまた、人生の多くの選択肢を前にして、何が最善なのかを迷っています。

しかしパウロは、私たちに「絶対的な答え」を提示するのではなく、二つの大切な基準を教えてくださいました。

一つは、「この世は一時的なものである」という視点です。結婚も、仕事も、財産も、この世のあらゆる事柄は過ぎ去るものです。私たちは、永遠に続くことのないものに心を奪われすぎることなく、真に価値ある「永遠のいのち」と、決して変わることはない「主ご自身」に目を向けることが大切です。みなさんは、この世の物事に囚われすぎていないでしょうか。

そしてもう一つの基準は、「いかにして主に喜ばれ、主に仕えるか」ということです。結婚するにせよ、独身でいるにせよ、再婚するにせよ、あるいはどの学校を選び、どのような仕事をするにせよ、私たちの人生におけるあらゆる決断の根底には、「どうすれば主への奉仕に専念できるか」という問いが必要です。

パウロが独身をより良いものとして勧めたのは、決して私たちを縛るためではなく、私たちが心を分散させることなく、ひたすら主への奉仕に集中し、真の益と祝

福を得るためでした。

皆さんは様々な選択をして今このところに集っておられると思います。そして、これからも、様々な選択をすることでしょう。その時、世の中の価値観や他人の期待ではなく、この世のものは一時的なものであるという視点と、主に集中して主に仕えるということを優先するという基準をもって物事を決めてみて下さい。

主は皆さんを束縛するためではなく、皆さんの益のために、皆さんを「品位ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるように」導いてくださいます。

まずはこれから始まる一週間、主に信頼し、主を基準として歩む一週間としてまいりましょう。